

香林



檀信徒各位

秋季彼岸法要のご案内

聖名

コロナ禍、自粛、豪雨、猛暑… 立て続けに災禍に見舞われ、皆さま心身ともにお疲れのことと思います。時には落ち込みもするし、文句も言いたくなってしまいますが、想像するに、私たちのご先祖様方も数々の災禍を生き抜き、私たちに命を繋いでくれています。今は私たちの踏ん張る番ではなかろうかと思えます。お気に入りの飲食店の持ち帰りメニューなど、美味しいものを食べて少しでも幸せに過ごすことで、何とか乗り切ることができればと思います。ただ、食べ過ぎには注意です。

秋季彼岸法要を下記のように勤めます。密になることを防ぐため、当日2回お勤めを行ないます。午前・午後、ご都合の良い方のご回向にお参り下さい。感染防止のため、席数を制限しております。満席の際は恐縮ですが入堂をご遠慮下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。

合 掌

記

※期日 9月22日(火) 秋分の日

11:00 より ご回向(午前の部)

14:00 より 法 話「あ～、いい気分」

布教師 佐賀教区 浄國寺住職 上田 光俊 師

15:00 より ご回向(午後の部)

※ご回向料

普通回向 1霊 1,000円 以上 ご志納下さい。

※お供え料 随意ご志納下さい。

本尊様のお供え、お花代等にさせていただきます。

新型コロナウイルス対策

◎ご参詣の皆さまへのお願い

- ・ ご参詣の際はマスクを着用いただけるようご協力をお願い致します。
- ・ 消毒液を配置しております。手指の消毒をお願い致します。

◎法要当日は講堂の扉、窓を開放します。墓参の帰り等、ご自由に阿弥陀様を拜んでいただければと思います。

◎受付の右側（ドアのポスト）に**無人受付**を開設します。「人ごみはできるだけ避けたいけれど供養はしたい」という方はご利用下さい。

無人受付開設期間：9月8日～25日

◎郵送及び FAX での受付は従来通り行なっておりますのでそちらの方もご利用ください。

今回もお勤め・法話の様子を You Tube で配信致します。
無量寺ホームページからご覧になってください。

久留米 無量寺



で検索または



私たちにも来る？

お迎え現象



引き続き、もういくつか事例を紹介しましょう。

こうりん

Aさん(65歳女性)は2014年6月、96歳の母親を看取りました。歌が大好きでよく歌っていました。歌が大好きでよく落ち、あまりしゃべらなくなりまして。ところが、亡くなる3週間ほど前から、部屋に誰もいなくなる、手ぶりを交えて言葉にならない声を発するようになりました。Aさんが部屋に入ると、動きはぱたりと止まり「誰とお話していたの」と尋ねても答えてはくれませんでした。ただ、Aさんは「時折、父の遺影を見て会話をしているようでした。父がお迎えに来ていたのかもしれない」と振り返ります。

Aさんは父親を亡くした際もお迎え現象を経験しました。亡くなる3週間ほど前、父親は1歳で亡くなった長男が自宅に来ていて、とはつきりした口調でつぶやきました。



その時は「亡くなった人が来るわけじゃないじゃない」と信じませんでした。ですが、没後、知り合いの住職から「お迎えが来ていたんだね」と教わりました。Aさんは「父も母も家族とともにあの世に逝ったと考ええると気持ちが楽になります」と話します。

◆ ◆ ◆
70歳男性。大腸がん。すでに終末期にさしかかっていたこの男性。以前は自分の意思表示も明確で医療者にも協力的でしたが、亡くなる1か月ほど前から言葉が発しなくなるといいます。

ある日、奥野医師が彼の病室を訪れた時、机の上に「南無真如一如大般涅槃経」と書かれたメモ帳が置かれているのに気付きました。奥野医師はそこで「信仰をお持ちですか」と問うと、うなずきました。「今、あなたの仏様はどこにおられますか」と問うと、「共に」と一言だけ答えました。「心配なことはありませんか」

と問うと、首を横に振って返事をされました。そして数日後、息を引き取ったといっています。

最後に奥野医師の著書

「お迎えされて人は逝く」の序章に、緩和ケア医としての現代社会に対する問いかけがありましたので紹介します。

〈以下抜粋〉 50年前までは自宅で生まれ自宅で死ぬことが当たり前でした。ところが高度経済成長と共に病院が各地にでき、病院で最期を迎えることが主流になったのです。病院に入ると容態によっては家族すら面会できないケースがあり、目の前で人が亡くなる体験が奪われてしまったのです。かつて身近な存在だった死が、どこか遠い存在になってしまいました。

いわゆる現代は、多くの人が「自分は死ぬ」ことを忘れてしまった時代とも言えます。誰もが死が訪れるのははるか遠い先の事のように考えているのです。そして、「死は縁起でもない事」として顔を背けられ、タブーとして隠されるべきものとして遠ざけてきた結果、余計に死への

恐怖を煽ることになってしまった。でも、人は誰しも、いずれは死ぬ運命にあります。顔を背け、目前に迫って初めて死を意識して慌てるのではなく、普段から死について考えてみる。そんな「死の予習」をしておくことで、最期の時期を有意義に過ごすことができるのではないだろうか。

◆ ◆ ◆
奥野医師は2015年9月、父親を亡くしました。その際、父親にお迎えが来たそうです。旧制高校のサッカー部の仲間4人が来たようでした。そこで、父親に真っ赤なユニホームを着せて送り出したということでした。

おわり

奥野 滋子 おくのしげこ

神奈川県立がんセンター、順天堂医院緩和センターを経て、現在医療法人社団若林会湘南中央病院 在宅診療部長として緩和ケアに携わる。

著書に「一人で死ぬのだから大丈夫」朝日新聞出版、「『お迎え』されて人は逝く」ポプラ新書、等。

玉田 行俊の

道場こぼれ話3

第七回



こんにちは、玉田 行俊です。久留米から久しぶりに東京へ出ると、人の多さに驚きます。入行前に前泊したホテルで朝食後に窓から下の道路を眺めていると、通勤の人々が列をなして途切れることなく歩いていきます。見える範囲の歩道はすくすくと人、人、人。各々が自分の職場のあるビルに吸い込まれ、一旦、通勤時間を過ぎてしまうと意外にも歩道は閑散とします。

(：もし大災害が起こったら、これほどの人数が無事避難できるのだろうか)などと考えてしまいます。ちなみに大きなお寺は災害時の避難場所となっていて、増上寺も港区芝地区の広域避難場所に指定されています。

◎見世物?

京都の道場では、道場生の勤行は基本的に非公開でした。それは道場生のへたくそなお経や指導員の怒鳴り声を一般の方が聞くと「いろんな意味でビククリするでしょうし、何よりも心穏やかに阿弥陀様を拜むことができないからでしょう。

今回、私達は「増上寺主催の勤行に参加させていただく」という立場でした。この勤行は毎朝・毎夕行う一般公開の勤行なのですが、増上寺は東京のド真ん中に立地するだけあって、観光客も凄く沢山いらつしゃいます。

道場生の念仏行道の列が境内を通過して大殿(本堂)に入ってゆく時は、ジョギング中の方や外国人観光客の方から写真を撮られてしまいます。やはりあまり見かけない光景なので珍しいのでしようか。ジョギング中の日本人はスツと携帯電話を出して撮影し、素知らぬ顔ですぐ走り去るのですが、外国人観光客の方(特に西洋圏の方)は

「Wow!!」とか言いながら、

「Wow!!」とか言いながら、いそいそとでつかいカメラを取り出し、めちゃくちゃ近づいて来て何枚も撮影します。我々としては、喉カッスカスでお念仏の声も思うように出てないし、トイレに行きそびれたり、疲れて放心状態の散々な姿なので「ちよつ、違うんです、我々みたいなもんを日本の坊さん代表と思わないで下さい、あんまり撮影しないで」と思いつつも、どうしようもないので表面上は出来る限りキリツとした顔を作って歩くのが常でした。

行道のルートは今までのような最短距離ではなく、わざわざ迂回して人目につき易いルートを指定されます。これは行僧を人目に慣れさせる訓練と、人に見られることで僧侶としての自覚を促し、自分を律することを学ばせるためと思われる(普段はふざけている者も、行道や勤行の時は真剣な顔になります)。

緊張はしますが、多くの道場生はまだ注目されることに慣れていないので、この訓練は非常に大切です。

そして、勤行中は私達の後方の椅子席に観光客や浄土宗に縁ある方が座って真剣な面持ちで合掌しています。毎日いらつしやる方、年配の方や若い方、目の青い方、明らかに憔悴し切った顔で来ている方もおり、ぎゅつと目を閉じて各々の思う所を阿弥陀様にぶつけています。そういった方々を見ていると、その真剣さが伝わってきます。

「この方々の前で、テキストなどをやる訳にはいかないな」僧侶にできることは限られています。真剣な思いには真剣さをもって報いなければなりません。

ただ、勤行で七十人以上がお経を読み始めても、椅子席で横になり熟睡してる方も居ました。世の中、いろんな方がおり、いろんな事情でお寺に来ているようです。

つづく